

体系物語文学史

第三卷

体系物語文学史

第三卷

物語文学の系譜Ⅰ
平安物語

三谷榮二編

有精堂

(校印省略)

体系 物語文学史 ISBN 4-640-32524-X

第三卷 物語文学の系譜 I

平安物語

昭和五十八年七月八日 初版発行

定価 一三〇〇〇円

編者 三谷 榮一

発行者 山崎 誠

発行所 有精堂出版株式会社

〒101 東京都千代田区神田神保町一―三九

電話〇三(一九二)一五二一(代)

振替口座 東京九―四〇六八四

Printed in Japan

ISBN 4-640-30452-8 C 3393

(第三回配本)

体系 物語文学史 第三卷

物語文学の系譜

I

平安物語

目次

《前期》

竹取物語	三谷邦明・二
伊勢物語	福井貞助・五
平中物語	関根賢司・七
大和物語	雨海博洋・七
宇津保物語	野口元大・九
宇津保物語第一部	室伏信助・二五
宇津保物語第二部	中野幸一・二〇
古本住吉物語	山口博・三四
落窪物語	高橋亨・四
豊蔭物語	長谷川政春・六
多武峯少将物語	鷲山茂雄・五
和泉式部日記	鈴木一雄・一四

散佚物語〈前期〉	藤井貞和・二九
----------	---------

《中期》

源氏物語	秋山 虔・三八
源氏物語第一部	森 一郎・三三
源氏物語第二部	石田 穰二・四〇
源氏物語第三部	野村精一・六〇

《後期》

浜松中納言物語	神田龍身・五五
夜の寢覚物語	永井和子・五九
中村本寢覚物語	河添房江・三三
狭衣物語	三谷栄一・四四

とりかへばや物語	今井源衛・三
堤中納言物語	三谷邦明・三
花桜をる中将物語	安藤亨子・四
このついで物語	神尾暢子・四
虫めづる姫君物語	阿部好臣・四
ほどのどの懸想物語	三角洋一・四
逢坂越えぬ権中納言物語	大森純子・四
貝合せ物語	鈴木弘道・四
思はぬ方にとまりする少将物語	豊島秀範・四
はなだの女御物語	杉山英昭・四
はいずみ物語	小嶋菜温子・四
よしなしごと	小峯和明・四
有明の別物語	大槻修・五

《前

期

竹取物語

三 谷 邦 明

一 書名、作者、成立、書誌・伝本

書 名

物語文学の成立を告げる『竹取物語』は、古代後期・平安朝の文学に様々な形で引用されているが、書名として掲載されるのは、『源氏物語』蓬生巻の、

ふりにたる御厨子あけて、唐守・藐姑射の刀自・かぐや姫の物語の、絵に書きたるをぞ、時／＼のまさぐり物にし給ふ。(二一―四一頁)^(注1)

という例と、絵合巻の、

まづ、物語の出て来はじめの親なるたけ取の翁に、宇津保の俊蔭をあはせて、あらそふ。……(中略)……ゑは巨勢の相覧、手は紀貫之書けり。かむ屋紙に唐の綺を陪して、赤紫の表紙・紫檀の軸、世の常のよそひなり。(二一―七九―一八〇頁)

という用例のみである。『源氏物語』の蓬生・関屋・絵合巻という極めて近接した巻で、「かぐや姫」と「竹取の翁」という異った書名が記されているわけで、従来から問題となってきたのであるが、後に記す「研究」でも考察してあ

るように、本来は「竹取の翁」という物語名であつたと考えられる。

『源氏物語』以前の初期物語は、現存する本文はともかく、物語名等の判明する散佚物語では、筋書等々を示す資料が僅少で、確定的なことは言えないが、想定を含めて分類すると、

④主人公の籠った場所を物語名とするもの——『宇津保』・『落窪』・『住吉』・『唐守』・『舍人の閨』・『はこやのとり』・『狛野』等。『伊勢』もこの分類に近い。

⑤主人公の呼称を物語名とするもの——『平中』・『伊賀のたうめ』・『今めきの中將』・『ながゐの侍従』・『交野の少將』・『かはりの宮』・『とは君』・『梅壺の少將』・『物うらやみの中將』・『正三位』・『芹川の大將』・『桂中納言』・『をはり法師』等。

⑥物語の内容を暗示する物語名——『音聞き』・『国譲り』(うつは物語の一卷か)・『道心すすむる』・『月侍つ女』・『殿移り』・『松が枝』・『埋れ木』・『物うらやみの中將』等。

の三つに物語名の付け方はほぼ分けられるが、物語史から言うとき④→⑥→⑤の展開をたどつて来た傾向が濃厚である。その点から『竹取物語』を読むと、

「いざ、かぐや姫。穢き所きたなにいかでか久しくおはせん」(六四頁)

とあるごとく、主人公のかぐや姫に焦点を当てると、彼女が天上界で「罪」(六三頁)を犯したために、地上で「いざさかなる功德とく」(六三頁)をつくつていた竹取翁の家に籠められていたと理解することは十分に可能で、⑥型というより、④型の書名が付けられていたと解釈できるはずである。つまり、「竹取の翁」物語と名付けられていたのであるが、⑥型は『三宝絵詞』前後から物語史に登場するので、その風潮に従つて「かぐや姫」物語と称せられるようになったらしい。しかし、両用されていた『源氏物語』においても、私的な場面では「かぐや姫の物語」と記しているものの(蓬生巻)、公的な場面では「竹取の翁」と呼んでおり(絵合巻、正式の物語名は「竹取の翁」物語であつたはずである。なお、今日でも主要な伝本はほぼ「竹取翁物語」であり、その「翁」を省略した「竹取物語」が通称とな

っているので、本稿もその表現を用いている。

作 者

物語文学、特に平安朝初期の作品では、〈作者〉は常に覆面を被っている。それには様々な根拠があるのだが、なによりもまず、初期物語が「男物語」であることがその理由にあげられる。本来は平安朝における正統的な文学Ⅱ文章である漢詩文を書くべき男性作家が、婦女子のために仮名文を表出するのであって、作者Ⅱ男性と読者Ⅱ女性との間にある距離と屈折度は極めて大きいものだと言わざるを得ない。そうした作者の内なる挫折と絶望が、初期物語の〈作者〉を不透明化する傾向を喚起するのであって、『竹取物語』もその例外ではない。と言うより、「竹取物語の方法と成立時期——〈火鼠の巻〉あるいはアレゴリー——」^(注2)という論文で述べたように、「物語の出で来はじめの祖」という位相が、更にその覆面性を強化していると言えよう。

ただし、それにもかかわらず、『竹取物語』は他の物語に較べ固有名詞に固執する傾向があり、例えば、大伴御行は壬申の乱に活躍した人物の実名で、応天門事件の伴善男との連想が生じ、大伴氏の反対勢力者の一人が作者であったと考えられるように、登場人物名等をめぐって種々の臆説が考察されている。源順・源融・僧正遍昭・紀長谷雄あるいは斎部氏や漆部氏関係者等々の説がそれだが、「研究」の項で述べるように、作者の精神構造は作品を通じてある程度還元できるものの、固有な個人までは永久に特定できないと言えよう。ただし、現在では文章道を学んだ律令官人・漢詩人で、「文章は経国の大業」的な詩臣意識に挫折した男性作家という説が有力である。

成 立

『竹取物語』の成立を語ることは、物語文学の成立を叙述することでもある。しかし、それについては本体系の第一巻中の「物語文学の成立」で述べているので、本稿では成立時期についてのみ考察することになるが、種々の考証が行われているものの、確定的だと言えるのは、上限に関しては、

④現行本ではかくや姫の昇天の段に「頭中将」とあるが、蔵人所の設置は弘仁元年である。

⑥物語中の和歌の三分の二は掛詞・縁語を盛んに用いるが、こうした傾向は貞観以後の六歌仙時代の現象である。

⑦この物語は伴御行という実名や石上麻呂を暗示する「石上麻呂たり」とか阿倍の御主人を示唆する「阿倍のみむらじ」が登場する。特に、伴御行は伴氏の勢力のあった時代には決して記入できない名で、貞観八年（八六〇）に伴善男が応天門の放火事件で失脚した以後の成立であること。

という指摘で、下限に関しては、

⑧『大和物語』七七段の源喜種の歌「竹取のよよに泣きつとどめけむ君は君にと今宵しも行く」が、『竹取物語』を踏まえているとすると、この和歌は延喜九年（九三九）のものと考えられるので、その頃には既に『竹取物語』は流布していた。

⑨書名の項に引用した『源氏物語』絵合巻には、「あは巨勢の相覧、手は紀貫之書けり」とあり、『源氏物語』における史実の記事は他の例から考えて信用できるので、貫之の没年は天慶九年（九四〇）と言われており、それ以前の成立らしい。

という説が信用できるとされている。この他にも、漂流譚との比較、仮名文字の成立等々の考証は存在するが、充分に説得力を獲得しているわけではない。

つまり、更に狭めれば、③と④の間、貞観・元慶・仁和・寛平・昌泰・延喜のほぼ五十年間に成立時期は求められるのだが、「研究」の項で述べているように、『竹取物語』においては、貞観・元慶期の歴史や社会がパロディ化されている傾向が強く、少なくとも仁和以前に成立していた傾向が強いと言えよう。

書誌・伝本

『竹取物語』は「物語の出で来はじめの祖」でありながら、室町以前の写本は存在していない。最古のものは断簡二葉が室町初期のものとして伝えられているが、これは現在二系統に分けられている現存諸本と性格の異なるもので、誤写・誤脱もあるが今後の課題となる系統だと言えよう。

現存本は大別すれば通行本と古本の二系統に分けられる。古本は新井信之所蔵の文化十二年（一八二五）奥書本が知られているのみで、他に校合書入れとして伝えられたものだが、本文がはなはだしく乱れており、改竄の跡もみられ、現在は、天正二十年（一五九三）書写の天理図書館所蔵の武藤元臣旧蔵本とその系統をつぐ、古活字十行本をはじめとする古活字本・整版本を含む通行本本文が研究対象となっている。

二 梗 概

物語は「今は昔」という冒頭句からはじまる。讃岐造麻呂さぬきのみやこまろという竹取の翁は、採っていた竹のうちに根元の光る竹を発見し、切ってみると三寸ばかりの可愛らしい女兒がいる。翁はその児を姫に預けて養うのだが、その後は黄金の入った竹を見つけたことが重なり富裕の者となった。女兒は三月程たつうちに成長し、髪上・裳着の成女式を盛大に行った。その際には三室戸みむろ齋部秋田に「なよ竹のかぐや姫」と命名してもらう。竹中に小さ子を得て富貴となったという、竹中生誕譚と致富長者譚が物語の冒頭を飾っているわけである。

そのかぐや姫に世の中の男という男が求婚する。夜でさえも垣間見しようとするので、「よばひ」と言うようになったのである。物語の段落は必ずこのように懸詞的な民間語源説を用いて終るのが特色である。

その求婚者のうち、石作皇子いしづくりのみこ、車持皇子くるちのみこ、右大臣阿倍みむらじ、大納言大伴御行おほとものみゆき、中納言石上麻呂いそのかみまろが色好み五人組として最後まで求婚しつづけ、翁に結婚を懇願する。翁もその五人の貴公子の熱意を汲み、神仏の生れ代りの姫を大切に養育したことや、翁の齡よひが七〇を越えたこと等をもちだし、結婚を拒むこばかぐや姫を強引にかきくどく。そのため、姫も遂に折れて、五人のうちでかぐや姫の見たいと望んでいる品物を持参した者と結婚すると返事する。

致富長者譚は長者となった者が驕おごったために富を失うという型をとるのだが、姫に結婚を強要する翁の行為に、既にその破綻が現われていよう。また、かぐや姫は古代のカタリゴトリ神話に類型的な、神に召された処女の姿が見られ、それが結婚拒否のモチーフを形成している。

かぐや姫は、石作皇子に仏の御石の鉢、車持皇子に蓬萊山の玉の枝、阿倍みむらじに火鼠の皮衣、大伴御行に竜の首の玉、石山麻呂につばきめ燕の子安貝という難題を課す。翁はあまりにも難しいと非難するが、姫は聞き入れず、貴公子達は素直に結婚をことわってくれた方がよかったのにとうんざりして帰って行く。難題聳入譚のモチーフだが、口承文芸では難題や登場人物の聖数が三であるのに対して、五となっているところにこの物語の特色がある。

五人の貴公子のうち石作皇子は打算的な人物なので、天竺にあるものをどうして取ってこれるだろうと判断して、三年程経て、大和国十市郡にある山寺の賓頭ひんず尊者の前の真黒な鉢を錦の袋に入れ、作り花の枝につけて、かぐや姫に送る。それには和歌さえ添えてあったのだが、螢ほどの光さえない鉢を見たかぐや姫は、厳しい非難を込めた返歌と共に鉢を返す。その鉢を皇子は門前に捨てたので、「はぢを捨て」と言うようになったのである。この段は、三首の贈答歌がある点に特色がある。

二番手の車持皇子ははかりごと謀計のある人で、朝廷には筑紫に湯治に行くという暇乞いをし、かぐや姫には玉の枝を取りに行くと言べて、難波から近侍の者だけを連れて出発するが、三日程で漕ぎ帰り、第一流の鍛冶匠六人を召して、かぐや姫の言った通りの玉の枝を作らせ、難波に密かに持ってきて、船に乗って帰ってきたとかぐや姫に告げ、長櫃に入れて持ってくる。かぐや姫は自分が負けたと思うほどである。翁は姫に皇子と早く結婚しろと言い出し、皇子も縁に登り、翁は聞のしつらいさえする。更に、皇子は三年間の船での彷徨と艱難辛苦とようやく蓬萊山に着き玉の枝を手に入れた様子を詳しく語り、翁と贈答歌を交わす。しかし、丁度その時に、作物所の工匠つくもどころ漢部内麻呂あやべのうちまろを先頭にした六人が玉の枝を造ったことと、その禄を賜わっていないことを直訴してくる。皇子の労苦が虚言であったことをかぐや姫は喜び、皇子は日没を利用して、そっと退出する。かぐや姫は工匠に多くの禄を取らせたが、皇子は彼等を打擲して、それを捨てさせ、一生の恥と思い、深山に入ってしまう。家来たちは探し求めるが所在が分らず、死んだのであろうか、遂に見つけることが出来なかった。それ故、「たまさかる」という言葉を使いはじめたのである。皇子が蓬萊山を求めて漂泊する話は虚構の中に更なる虚構を挿入している点で、この物語の方法、技法を解明する鍵の一つ

となっている。また、大伴御行の漂流譚には、遣唐使をはじめとする中国との交渉の難苦を示す時代状況が反映しており、工匠等のような庶民が活躍する面でも注目される章段である。

阿倍みむらじは、財力のある人物で、その年に来た唐土船の王けいに對して、「火鼠の皮を買ってくるように」という手紙と黄金を、小野房守という信頼できる人物に託して送る。王けいは難題だが天竺にさえ手をまわし探し出そうと返事する。その後、唐土船が博多を訪れ、房守は皮衣と王けいからの手紙を持って七日のうちに上京する。更に五十兩の金を要求されるが、右大臣は伏し拝んで感謝し、瑠璃で飾った箱に入った皮衣を持って、着飾って、かぐや姫を訪れるが、姫の要望で火で焼いてみると、めらめらと焼けてしまう。世の人が大臣がかぐや姫の家に住んでいるかと尋ねると、結婚していないと答えたので、成就できないことを「あへなし」と言うことになった。この段も、当時の権勢者が中国と私的交易をしていることに對する諷刺が述べられていると言えよう。

武人の大伴御行は一族郎等を集めて、竜の首の珠を取ってくるように求め、財物を与えて派遣し、かぐや姫を迎える豪華な屋敷を造営する。しかし、誰も帰参しないので、二人の舍人を連れて難波の辺から筑紫の方の海に漕ぎ出す。間もなく、暴風にまき込まれ遭難し、竜の首の珠を殺そうとしたあたりであったことに気付き、神仏に懇願してようやくのことで播磨の明石の浜に漂着するが、杏を二つつけたような目をした、死人に近い重病人としてであった。手與で荷われて帰京し、派遣した男たちに「かぐや姫が私を殺そうとして難題を与えたのだ」と言い、帰参を許した。世間の人が大納言は竜の首の珠を取ってきたかと尋ねると、杏のような目をして帰ってきたと言うので、「あなたへ難」と言うようになった。他の登場人物と異なり武人らしい諦観が描かれており、漂流譚としても重要である。

最後の石上麻呂は家来達に尋ね、大炊寮の飯炊く屋に多数の燕が巢食っていることを聞き、二十人程の家来を派遣して子安貝を獲りに行かせるが無駄で、寮の官人くらつ麻呂が静肅にして獲ることなどを教示したので、被け物を与えるほど信用して、その言に従うがなお無駄であったため、中納言自身が荒籠にのって燕の巢をさぐるが、古糞を握って落ちてしまう。それ故、「かひなし」と言うようになったのだが、中納言は腰を折り、死にかけるようになる。

その様子を聞いたかぐや姫は見舞の和歌を贈るが、そのかきもなく息絶えてしまう。かぐや姫も気の毒に思った。それ故、少しうれいことを「かひあり」と言うようになった。五人の貴公子のうちで最も好意的に描かれているのがこの章段で、末子成功譚的な型を持っていると言えよう。

さて、かぐや姫の容貌の美しいことを聞いた帝は内侍の中臣なかとみふさ子を派遣して入内を求めるが、姫のすすめにもかかわらず、帝のお召しは「かしこしとも思わず」とかぐや姫は述べ、求婚は拒否される。ふさ子は勅使の役割を果せず帰参し、かぐや姫は国王の仰せにそむいたと言うなら殺してくれとまで述べる。権力にまでなびかない絶対的なものとして、かぐや姫は造型化されているのである。

それを聞いた帝は竹取の翁を召して、入内させたならば五位の位をさずけると約束をする。翁はかぐや姫に入内をすすめるが、姫はそれならば死んでしまうと述べるので、翁は参内して事情を説明し、帝は御狩の行幸にかこつけて、翁の家を訪れる計画をたて、かぐや姫に会うが、かぐや姫は幻影となつて消えてしまう。狩も当時の宮廷風俗を反映した行事である。

天皇はかぐや姫をすばらしい美女だと思い、入内させられないことを残念に思い、帰りに歌を贈り姫も返歌する。帰京後、后妃と比較して姫の美しさに憧憬し、常にかぐや姫と手紙のやりとりをする。神の嫁として結婚は拒否するものの、書簡・和歌による帝との交渉を描いている面に注目すべきであろう。

さて、帝と心を慰めあつて三年ほどたった春の初めに、かぐや姫は月の美しいのを見て物思いにふけり、七月十五夜には縁に出て、ひどく悩んでいる。翁が尋ねるとその理由を答えないが、八月の満月に近い頃に、泣きながら、自分が月の都の人で今月の十五日に本国からの迎えの人々が来ることを告げる。翁夫妻は死にそうになって、とどめるが、かぐや姫は自分の意志ではどうにもならないことを悲しみながら話す。ここではじめて姫が月の世界の天人であることが語られる。また、月に対する平安朝の習俗・民俗等がこの章段に記述されている。

この事を聞いた帝は竹取の翁の家に使を遣わし、翁は五十歳なのにもっとふけてしまったことや、十五日のことを